

中国の若手小学校教師における感情労働の負担

——SNS を介した保護者対応に着目して——

LI Anqi

本研究の目的は、中国の若手小学校教師が WeChat や QQ などの SNS を通じて保護者とやり取りするなかで、自身の感情とその表出を整えて対応を成立させる過程を感情労働として捉え、それがどのように強く求められ、どの場面で繰り返され、どのように負担として積み重なっていくのかを、当事者の語りに基づいて明らかにすることである。本研究では、家庭と学校のコミュニケーションを便宜上、家校コミュニケーションと呼ぶ。

近年の中国の義務教育現場では、家校コミュニケーションの中心が SNS へ移りつつある。SNS 下のやり取りは即時に届きやすく、勤務時間外にも対応の判断が入り込みやすい。また履歴が残るため、文面や返信のタイミングが後から見直され、保護者間で共有され得る。こうした条件は、教師と保護者の関係を、接触の近さ、第三者に見られやすいこと、責任の重さという点で変化させ、対応に伴う緊張や警戒を生みやすくする。

そこで本研究は、感情の地理学を手がかりにやり取りの条件の変化を整理し、その変化がどのような感情規則を強めるのかを捉えたうえで、その規則に沿って感情と表出を整える営みを感情労働として記述した。調査は、中国本土の公立小学校に勤務する若手教師 6 名を対象に半構造化インタビューを行い、逐語録を対象にテーマ分析を行った。保護者対応に関する発話を抽出し、意味のまとまりごとに整理したうえで、テーマとしてまとめた。

本研究の知見は主に三点である。第一に、SNS は勤務時間外まで接触可能性を広げ、返信の遅れが不誠実と受け取られ得るため、時間の境界を揺らしやすい。加えて履歴が残ることで、ほかの保護者や管理職に見られることが意識され、対応は評価や苦情につながり得る場として経験されやすい。第二に、この条件のもとで、迅速さ、丁寧さ、誠実さ、落ち着きが感情規則として強く求められるようになる。迅速さは返せない理由の説明や返信する時間帯の調整まで含み、丁寧さは衝突を避ける語調と伝える順序として現れ、誠実さは筋道立った説明と責任ある態度が伝わる表現として求められる。第三に、教師はこれらの規則に応じるために、表層演技として文面や語調を整え、深層演技として受け止め方を立て直し、自然な感情表出として

現れる場合も含め、対応を成立させていた。連絡の入口や時間帯、媒体を調整する実践もみられたが、境界を引く場面でも相手の不安や反発を強めないよう語調を抑え直す必要があり、ここでも感情労働が伴っていた。若手期は関係が固まりきらず不確実性が大きいため、慎重な対応と調整の反復が重なり、負担が蓄積しやすい。また肯定的反応は手応えを与える一方で期待水準を押し上げ、次の対応を重くする場合もあった。

以上より、本研究は、SNS 下の保護者対応の負担が連絡件数の多さだけでは説明できず、やり取りの条件の変化を通じて感情規則が強まり、それに沿った感情労働が繰り返され、勤務外にも持ち越されながら蓄積していく過程として理解できることを示した。今後は、保護者側・管理職側の判断基準も含め、感情規則が強まる条件と負担が集中しにくい運用条件を比較の視点から検討する必要がある。